＜研究ノート＞

イギリスの女性運動

――慈善運動・女性参政権運動・女子労働・女子教育――

吉田　尚子

1.　イギリスにおける女性運動の始まり

女性が男性に隷属するという社会的慣習は歴史が始まって以来，長い間，社会構造の一部になっていて，女性はその間，それに耐え忍んできたが，イギリスでは19世紀になって，本格的な女性の反乱が起こって来る。何故，他の時代でなく，19世紀に女性の反乱が起こったかを考えると二つのことが大きな原動力になったと言える。まず，ひとつは1789年に起こったフランス革命であり，それがもたらした教義，理念，すなわち「自由，平等，博愛」という啓蒙思想に影響されたことである。第二の要因は18世紀末に起こって19世紀に完成した産業革命の経済的変化によるものである。イギリスにおいて，女性運動の始まったのはメアリー・ウルストンクラフト（1759―1797）が書いた『女性の権利の擁護』が世に出た1792年とされている。この本は女性運動の古典と呼ばれるもので，すでにフェミニストの理想の大筋が述べられ，男女平等など人権に対する要求が書かれている。その当時この本はほとんど注目されず，これ以後，フェミニストの理想は立ち消えになったように見えた。イギリスの支配階級は海の向こうで起きたフランス革命の理念によって自国の国家体制が破壊されることを恐れて，国の門戸を閉ざし，現状をそのまま維持しようとしたからである。しかし，この本が刊行されて以来，それが女性運動の原点となっている。

イギリスはこれまでの封建主義体制を守ろうとして，先祖伝来の習慣，伝統，偏った考えに強くしがみついていたが，やがてそれは崩れ去る運命にあった。18世紀に起こり，19世紀に完成した産業革命によって，封建制度が崩壊し，産業を担う新興市民階級（ブルジョワジー）の台頭により，経済力を持った中流

上層階級の人びとが貴族に代わって社会の中核を担うようになった。工業化によって工場などが作られると夫は外に働きに行くようになり，これまで家内工業などで夫とともに仕事に従事していた女性は，家に残って，家庭の仕事に従事するようになった。特に，社会の中枢を担ったブルジョワジーである中流階級では仕事場と家庭が分離するようになり，妻は仕事で疲れた夫に安らぎと慰めを与え，子どもを育てることに専念して，家庭を守るというのが，社会の慣習になった。18世紀から19世紀初めに始まった福音主義は宗教を世俗化し，マナーと道徳を改善することによって，フランス革命後のイギリス社会の精神的動揺を立て直そうとした。福音主義者は家庭の重要性を唱え，女性は家庭を守るべきであると主張したが，その家庭観と女性観が中流階級に浸透していったために，性別の役割分化に拍車をかけることになった。そして，女性は「家庭の天使」として家庭を守ることが務めであり，それが女性の美徳とされるようになった。さらにブルジョワジーは経済力が増してくると妻が働くことは夫の体面を傷つけることになり，育児や子どもの教育は乳母やガヴァネス(女家庭教師）に任せるようになり，妻はすることがなくなってしまった。そのような彼女たちの生活形態は「完全な淑女」として「遊惰」と呼ばれる有閑生活を送るようになり，女のたしなみを身につけることが重要になった。

当時の社会の一般通念は男性の方が精神的に，肉体的に，そして道徳的に女性より優れているとされ，それは明らかに自然の法則の一つであると思われていた。従って，女性は保護され，守られ，甘やかされなければならない存在だった。女性は男性に服従し，野望，功績，独立心を持つことは女らしくない資質であり，服従，謙遜，利己的でないことが女性の美徳だった。女性は子どものときは父親に，結婚すれば夫に従うというように経済的にも精神的にも男性に依存しなければならなかった。メアリー・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』が出た後，このような家父長制の社会においては表面的には状況は変わらないように見えた。しかし，一見変わらない社会状況の向こう側から博愛主義運動というサーチライトの光が射しこんできた。「完全な淑女」となって，家庭にいても，することがなくなった中流上層階級の女性たちは何か社会のために役立ちたいと思い，家の外の世界に出て行き，やがて慈善運動に従事していくことになる。若い女性たちは自分たちの居た家の客間の外に出て行っ

て，周りを見渡すと，社会には何と不満足なことが多いか知るようになった。貧しく，餓えている人びとが多いのに驚き，年老いた人々や子どもたちの身なりもみすぼらしく，雨が小屋の屋根から漏るのを見たりした。しかし，彼女たちは自分たち自身が「女にすぎない」がために，十分な善行もできないことを悟ったのだった。そして，その光から女性運動が生まれたのである。

2. 慈善運動

19世紀のイギリス社会に広がっていった福音主義の家庭美化と重視の考えは詩人，劇作家でもあったハナ・モア（1745—1835）が福音主義と女性を結びつけたために，一層強化された。ハナ・モアは無意味で，軽薄な目的からかすめとられた時間とお金はキリスト教徒の慈善という賢明な仕事に向けられるべきだとして，慈善活動への女性の参加を認めた。そこで中流上層階級や上流階級の家庭の若い女性たちの中には家の外の世界に出て行き，慈善運動に生き甲斐を見つけるものが出てきた。彼女たちは貧しい人たちを家庭訪問したり，彼らに毛布やスープを配ったり，聖書の購読，日曜学校の開設と運営，養老院・孤児院の運営資金集めのためのバザーの開催など様々な運動に加わっていった。ハナ・モアは日曜学校や，「貧民や病人」の家庭訪問を流行らせた。ハナ・モアと彼女の姉妹達が，個人的に，チェダー・ヒルズの学校で荒れた子供たちに教え始め，女性にとって新しい活動の分野を切り開くことになった。彼女たちの主な目的はそれぞれの人たちが置かれた立場で彼らに与えられた運命に甘んじるように教えることだった。保守的な考えの彼女には少しもその意図がなかったにもかかわらず，結果的には中産階級の若い女性が家の外で活動する新しい分野を切り開くことになった。中流階級に属しているハナ・モアやそのほかの善良な女性たちが，女性運動の創始者となったことは不思議に思えるかも知れないが，彼女らが創始者であることは明らかである。

このように慈善運動に参加するために，家の外に出て行った裕福な家庭の女性たちの中に，ルイザ・トワイニング（1820—1911）がいる。彼女は紅茶業と慈善事業で著名な裕福な家庭に生まれたが，たまたま，年老いた乳母が住んでいたスラム街を訪ねたことから，慈善運動に入っていった。彼女はワークハウ

ス（救貧院）を改革したり，ワークハウス訪問協会を結成したりして，結果的には女性が救貧委員になることが出来る法案を成立させるのに大きな役割を果たした。また，メアリー・カーペンター（1807—1877）は牧師の娘で，ブリストルに母親と共同で女学校を設立したり，1846年にブリストルのスラム街に貧民学校を開設したりした。フローレンス・ナイティンゲール（1820—1910）も裕福な家庭に生まれて何不自由なく育てられたが，彼女は社会的地位の高い，金持ちの男性と結婚して，ただ夫の飾り物になるような結婚をすることは自分を束縛する生き方だとして嫌い，若い貴婦人が受ける束縛や制約に対して反乱を起こした。そして何か世の中のために役立ちたいという気持ちが強くなり，結局，クリミア戦争で，戦場に赴き，イギリスの軍隊に医療組織を編成し，負傷した兵士の看護，治療に携わった。戦後，彼女はナイティンゲール看護学校をイギリスに設立したりして，看護の世界に大きな功績を残した。彼女は一応，フェミニストであり，女性参政権の請願書に署名し，その運動を良しとしていたが，しかし，実際には彼女は女性参政権からは「多くを期待」していないと公言していた。看護婦の職業的地位向上のために，猛烈に戦った時でさえも，ともに仕事に携わった仲間の女性たちが無能で，精神力に欠けているのをしばしば目の当たりにしていたので，女性運動には懐疑的だったのである。しかし，彼女の女性運動に残した功績は大きく，運動を進展させるのにひとつの大きな弾みになったことは確かである。

社会問題に対する積極的な取り組みを目的として，1857年に公衆の健康増進活動の先駆者となった社会科学振興国民協会が組織されたが，これが急速に博愛主義運動の中心となり，かつその推進力になった。この協会はルイザ・トワイニングやメアリー・カーペンターなど当時の女性活動家たちに講演や執筆の場を提供し，女性の参加を認めたので，フェミニストたちの重要な社会への登竜門になった。最終的に実を結んだ多くの慈善事業の計画はもともと，この会合で最初に議論されたものであり，ルイザ・トワイニングのワークハウス訪問協会はこれらのうちのひとつである。慈善事業に携わった女性たちのほとんどが社会の悪弊を認識したが，その時，彼女たちは女性の無力さに不満を持つようになり，その結果，フェミニストを数多く生み出す結果になった。

慈善活動をした裕福な家の娘たちは彼女たち自身の限られた，つまらない生

活に対する反抗が当然のこととして起こった。女性たちが一度，自分たちのいる客間の外の世界を眺め，他の人々が直面している厳しい現実を見始めると，知的で，精力的な女性たちは自分たちの装飾的で無意味な生き方に反抗するようになった。しばらくの間は，スープと毛布を配る慈善活動に満足していたが，それも長くは続かなかった。若い女性たちの中のある者たちは因襲に縛られた生き方から脱して，現実の世界で名を成したが，彼女たちの間で，いかに一種の暗黙の友情と共感に基づく理解が成立していたかはお互いにやりとりした手紙を見るとわかる。そのような女性たちは志を同じくする人たちを見つけだして，いわばお互いを認め合った。そして，彼女たちはそれぞれ，している仕事と関心の対象は異なっていても，「女性の権利」という点で一致していた。

しかし，このようなパイオニア的女性はわずかしかいなくて，彼女たちの住んでいた世界は非常に違っており，そこでは従来の理想像を依然としてまだ受け入れていて，法律によって，女性はひどく不利な立場に置かれていた。一般の女性にとってはこのような現状は嘆かわしいことではなかった。彼女たちは自分たちの法律上の身分については何とも思わなかったし，「女性の権利」にはまったく関心がなかった。このような女性たちは自分たちのいる世界に甘んじていて，自分が知的で，美しく，明るく，その上，家庭が幸福ならば，それで充分楽しく暮らせた。しかし，現実を考えると女性たちの幸福は男性に依存するものであり，不安定な基盤の上に立っていて，一度それが壊れたならば，すべてが駄目になる運命だった。もし，父や夫が亡くなったり，夫と離婚したりすると女性たちの生活はすべて，粉々に崩れさる可能性があり，結局，女性は男性に依存する存在に過ぎず，女性自身が有する社会的地位というのは実際にはなかったのである。

3. 政治における女性の権利の主張

（A） 1850年以前

1838年に起こったチャーティスト運動はイギリス労働者階級の政治運動で，普通選挙法などを要求したが，その「権利と自由の憲章」には女性参政権がはっきりと述べられていた。しかし，多くの会員は法案にそれが盛り込まれると

男性の選挙権を主張するのに妨たげになるかもしれないと危惧したので，それは即座に削除された。女性運動に対するこのような男性側の反発はこの後に起こってくる女性参政権獲得運動が直面した問題で，このことは運動を進めていく上でこの後ずっと戦っていかなければならない問題になった。チャーチストたちは女性参政権を自分たちの目的からはずしたが，しかし，憲章の目的を推し進めるために多くの女性団体が設立されて，そこでは女性も参加し，チャーチストたちの定例会議で女性たちは決議案に投票することを許された。しかし，1842年までにはそれらの女性団体のほとんどが消滅した。一方では急進的な雑誌には女性参政権を擁護する記事が出たり，女性参政権を擁護する請願書が議会に出されたりしたが，まだ，その機は熟していなかったのである。

しかし，女性の政治への関わりは，組織的なレベルではないまったく別な方向から起こった。それは政府実務を司っていた男たちとの交際，友情，恋愛を通して可能になる個人的なレベルのものであり，世界史上，女性が関係していたこの種の政治的影響力は，時には大変重要だった。美しく，賢く，野心のある女性は，その個人的魅力や影響力を武器として使い，幾度となく，公の出来事の方向を変えてきた。それに関わった女性は反フェミニストを公言し，やり方も旧式であったにもかかわらず，結果は実際に女性の地位を改善するための法成化を進める初めての試みとなった。このような人物は，当時置かれていた女性の立場から生じるほとんどすべての弊害を経験し，その個人的な苦しみが彼女を行動に駆り立てたが，彼女のやり方は，昔ながらの女性特有のしたたかさによるものだった。

作家のキャロライン・ノートン（1808—1877）はこのような女性の一人だった。彼女はシェリダン家の美人三姉妹のひとりで，社交シーズンにはロンドン社交界をたちまち魅了し，機知に富み，才気豊かで魅力的であった。彼女は19才の時にリチャード・ノートン卿と結婚し，すぐにロンドン社交界の花形女主人の一人となった。当時の大物たちは皆，彼女の虜になり，キャロラインとその夫は社会的には大変に成功したが，家庭生活は幸せではなかった。二人は頻繁に口論し，彼女は殴ったり叩いたりする夫のリチャードから逃げ出した。しかし，リチャードは妻が実の妹の家を訪ねている留守をねらって，自宅から三人の子どもたちを連れ出して，母親が子どもたちに会えないようにした。

キャロラインは実家に身を寄せ，法によって定められている立場のひどさに気がついた。夫はキャロラインと親しかったメルボーン卿を相手取って，妻との姦通を理由に訴訟を起こした。彼女は無一文で，稼いで収入を得たとしてもそれを所有することができないばかりか，自分の子供に対して全く何の権利もなく，この裁判に対して，自分には何の法的資格もないことがわかった。既婚の女性であるために，彼女は訴えることも訴えられることもできなかったし，裁判で弁護士に代弁してもらうこともできなかった。夫は彼女のすべての願を退け，法的権利によって彼女の家具や財産をすべて差し押さえた。彼女はひとりきりで資金もなかったが，子どもに会うためには国の法律をも変えることを決意した。

彼女の作品はすでによく知られていたので，彼女が母親の権利を主張する意見を書いたパンフレットは，すべての議員たちに送られると，彼らの関心が強まり，彼女に対して好意的な意見が出て，1839年に未成年者保護法案が通過した。この法案は控えめなものであったが，当時としては驚くべき大改革であり，母と子どもに関係している法律に彼女が作った突破口は，深く大きくなり，ついに，古くからの不公平は1925年の「未成年者保護法」により改善され，子どもの保護者として父母にはまったく平等の権利があることが認められたのだった。また，それらのパンフレットが1857年の「結婚および離婚法」や「既婚女性財産法案」の可決に影響を与えることになった。

（B） 1850年以降

1850年までの女性運動は，散発的，断片的なものであり，とうてい運動などと呼べるものではなかったが，1850年以降，この運動は組織的な運動という新たな様相を帯びてきた。つまり，それぞれの活動家が，数を増しつつあった支援者に支えられて，ひとつの大きな運動の中に自分の活動の場を以前より見つけやすくなり，組織的な運動という性格に変わって来た。女性運動を活気づかせたのは1850年代，60年代の急進派の組織的な運動か，それとも慈善家たちの博愛主義運動かを判断するのは難しいが，この二つの運動は，同時期に起こったので，当然，互いに作用しあい，一方が新しい思想の陣頭に立ち，もう一方が家庭という囲いの外に広がっていった結果，女性が社会で活動することを受

け入れ，それを認めるように一般の人々を教育していくこになった。

女性の地位についての問題が議会の審議事項の中に盛り込まれたのは，ひとえにイギリスの哲学者で，経済学者，そして政治家でもあったジョン・スチュアート・ミル（1806—1873）の力によるものである。「あらゆる法的，政治的，社会的，家庭的関係において，男性と女性の間には完全な平等が存在しなければならない」という彼の確信は政治的な問題を考えるようになった時，最初に到達した考えだった。彼が24才の時に始まったハリエット・テイラー（1808—1858）との友情がこの信念を強め，深めさせたのである。ハリエット・テイラーにはジョン・テイラーという夫がいたが，ミルと出会い，親交を深めていく。夫も寛大で二人の交際を認め，別居していたが，夫が亡くなるまで，結婚は続いた。そして夫が亡くなるとミルとハリエットは結婚した。二人にとって同じ家に暮らすのは，この上ない喜びだったにちがいないが，法律によって規定されるような婚姻に彼らは激しく反発した。ミルは婚姻の法的意味を否認する文書を正式に作成し，それに署名した。彼のこの考えは『経済学原理』と『自由論』において，暗に示されたが，妻の死から三年たった1861年に出版された『代議制統治論』では，さらに進んで，女性の参政権をはっきりと明確に主張した。この『代議制統治論』が出版された同じ年の1861年に，『女性の隷属』と題したもう一冊の本をミルは執筆した。この本が出版されるまで八年以上を費やし，その間に女性参政権運動は公に認められるようになり，ミル自身も下院にこの問題を提出した。ミルはメアリー・ウルストンクラフト以来，この運動のあらゆる擁護者がずっと取り続けてきた立場を取った。この本でミルはかつてなかったほどに，女性全体の隷属が意味することを論じた。そして，この大きな要求を考え出すに至ったのは，妻のおかげであると彼は述べた。

最初の組織だったフェミニストの組織が1855年に誕生したが，これを率先して行なった中心的人物は，女性運動の最初の段階での組織化にもっとも重要な役割を果たした女性だった。この女性はバーバラ・リー・スミス（結婚後，バーバラ・ボディション，マダム・ボディションとも呼ばれる）（1827—1891）で彼女はその年に「既婚女性財産法案」のための請願書を集めるために委員会を招集していたからである。この委員会は決して大きいものではなかったが，イギリスで出来た最初の組織だったフェミニストの組織という意味で重要であ

る。彼女はノーリッジの急進派ベンジャミン・スミス氏の長女として生まれ，フローレンス・ナイティンゲールのいとこにあたり，この一家は，有力な親類縁者を持ち，裕福であったばかりでなく，非常に進歩的な考え方をしていた。彼女は長身で美しく，物惜しみせず，まったく気取りのない人物であり，有り余る興味と才能を持っている女性だった。スミス氏は，当時のあらゆる改革者や慈善家と顔見知りで，その娘は若いうちから，法律，政治，文学，芸術といった様々な分野の集まりに顔を出したが，そこで彼女は女性が未婚にしろ，既婚にしろ，財産の所有権が一切無いことに気がついた。そこで，彼女は，イングランド，スコットランド，アイルランド，ウェールズにおける財産所有権を改正するのが自らの職務であるという結論に到達し，まず，彼女はこの問題を熟知することから始め，「女性に関する最も重要な法律の要約」を執筆し，出版したが，それはすぐに広い範囲で売れた。

このパンフレットは，バーバラの友人の裁判官に手渡され，それは法律改正協会に提出された。この協会には多くの著名な法律家が参加していて，そこでこの提議が非常に注目された。翌年，そのことに関した報告書が検討され，そこで所有権と遺言作成権を既婚女性にも与えるべきだという提言がなされた。そして公開集会が計画され，それが開催されると多数の著名人と意外にも多くの婦人たちが出席した。提出された修正案を支持する決議案は承認され，バーバラ・リー・スミスが起草した請願書は署名を集めるために回覧された。続いて他の場所でも集会が開かれて請願書も提出され，年内には男女合わせて26,000名がその修正案に賛成の意を表わした。その後，請願書は両院に提出されたが，当然のごとく賛成派，反対派双方ともに激しく議論を戦わせた。反対派は，その改革が女性を，男性にたてつくような，いまいましい自己主張の強い人間に変えてしまい，社会や家庭を崩壊させてしまうと主張した。しかし，1857年5月にその法案が初めて，下院に提出され，大きな混乱もなく第二読会を通過し，バーバラと彼女の友人たちは狂喜した。しかし，ちょうど同じ時期に「結婚および離婚法」が議会で成立した。それは妻の不貞で夫は離婚が出来るが，夫の不貞は妻の側での離婚申し立ての十分の理由にならないとか，既婚女性全体の財産権は認められないなど，あまりにも女性の権利が限定された内容であった。

この条例が法律全書に収録された時，これ以降しばらくの間は「既婚女性財産法案」に関してこれ以上の進展は期待できないのは明らかだった。そこでバーバラ・リー・スミスとその友人たちは，女性にとってのもう一つの重大な難問，つまり雇用問題に次の矛先を向けた。この問題は慈善運動の高まりのおかげで，今や人びとの注目を集めることのできる段階に到達していた。

4．『英国女性ジャーナル』(1857)（*English Woman's Journal*）の発刊

「既婚女性財産法案」の成立を推し進める機会が1857年の「結婚および離婚法」の成立によってつぶされた時，前者の法案を正式に成立させる運動は立ち消えになってしまった。それにもかかわらず，その運動によって，非常に多くの積極的で，同じ考えを持った人びとが相互に連結し合うようになり，当初の努力はまもなく新しい結果を生み出した。この運動で賛同した人々は他の多くの点についても同意見であることがわかり，共鳴者の輪が広がり，大きなグループが出来た。このグループの大部分は若い女性から構成されていて，バーバラ・リー・スミス自身もいた。しかし，彼女たちよりもっと年上で，はるかに身分の高い女性が一人，二人いて，彼女たちの考えを積極的に支持した。彼女たちの共鳴者たちが自分たちの考えを推し進める計画を真剣に議論し始めるとその分野は広く，慈善運動，教育，法律，習慣などにわたったが，彼女たちはまったく，ひるまなかった。これらの問題に最も効果的に取り組むための最初の方針はどんなものが良いかなどについて議論すると大多数は新聞を発刊するのが良いという意見になった。

そのグループの中で最も影響力が大きく，裕福な人はやはり，バーバラ・リー・スミスで，彼女の共鳴者たちが彼女をジャーナリズムや文学の世界の人々に接触させたので，彼女は作家のハリエット・マーティナウ（1802—1876）やジョージ・エリオット（1819—1880），またあらゆる種類の著名な人々から忠告を求めることができた。そして，バーバラはその計画に熱心に身を打ち込み，彼女たちが最初に取り組むべきことは女性の賃金を得るための勤め口の問題だという結論に達した。世間で認められている考えは中流階級の女性は賃金労働者ではなく，経済上の勤めなどまったく持つべきでないというものだった。

しかし，実際の生活は違ったもので，女性のためには雇用の機会はほとんどなく，ひとつの口に対して労働者があまりに多く，仕事にあぶれてしまうことを知った。保守的な雑誌が彼女たちに敵対的な記事が出るたびに却ってその小さな一団はもっと目的に向かって努力しなければならないと思うようになり，新しくグループに入る女性が増えた。新聞を発行するという計画は大きく広がり，1857年にバーバラの友人のベッシー・レイナー・パークス（1829—1925）が編集長になって『英国女性ジャーナル』の第一号が出た。事務所はロンドンのランガム・プレース（Langham Place）19番地に設立され，すぐにそれらは活動の拠点となり，そこから同じ小さいグループが様々な多くの事業を始めた。

彼女たちはランガム・プレースに「女性雇用事務局」を設立したが，それは急速に発展して，「女性雇用促進協会」の設立を見た。ランガム・プレースで会合を開いて，女性の雇用や教育，法改正によって女性の状況改善のために活動をしたグループをその地名にちなんでランガム・プレース・グループと呼んだ。その家は広く，事務所のほかにクラブ室，読書室，食堂があり，ここで，メンバーたちは1850年代後半から1860年代初めまで「女性雇用促進協会」の運営や，女性芸術家協会の設立，『英国女性ジャーナル』の編集を行なったり，相互支援のネットワークを提供したりした。『英国女性ジャーナル』はそこで設立された組織の事業のすべてに携わった。男女平等の理念を説く決心をして，『英国女性ジャーナル』を発刊した彼女たちは社会科学振興協会を通じて，著名で，重要なパトロンを見つけることができ，組織についての教えを学ぶのも速かった。その頃，進行していた女性の高等教育のための運動も支持し，女性運動と結び付けられるものはすべて，巧みに扱った。その雑誌はまた，女医に対する賛成論を表明したが，女医が議論の対象になったのはこの時が初めてだった。ランガム・プレースのグループの最初に取り組む問題は女性の雇用口の領域を広げることだった。事務所が開かれると，すぐに女性の労働者で一杯になり，そこからガヴァネス（女家庭教師），簿記係，秘書などの職業人が生まれた。また，これを契機にして店員，事務員，電信，そして看護婦など四つの大きな職業の門戸が開かれ，それ以来，それらの職業に何百万人の女性たちを雇用してきた。「機関紙」が発行されると一般の多くの人たちに運動の考えや情報が伝えられ，主義に賛同する人びとが増えた。地方の若い女性の中にはロ

ンドンの事務所まで来て，そこにとどまって仕事を手伝った者もいたし，だまされた女性，虐待された女性たちなど家庭や仕事など色々な問題を抱えて，助けを求めに来た女性たちも来た。そこで様々な良い着想がなされたが，そのひとつに，女性が植字工に何故なってはいけないのかと議論しているうちに自分たちで印刷所を設立することを計画した。そこでエミリー・フェイスフルは「ヴィクトリア・プレス」を設立し，そこで『英国女性ジャーナル』を印刷した。

1859年はフェミニストたちの計画を立てる温床になっていたランガム・プレースの事務所が開いてまだ二，三ヶ月しか経っていなかったが，二人の新参者が入って来たことが，これからの女性運動に巨大な影響を与えることになった。これらの二人はエミリー・デイヴィス（1830—1921）とエリザベス・ギャレット（1836—1917）だった。この二人は両方とも，ランガム・プレース・グループにはうってつけの人材だった。彼女たちは二人とも寛容な家庭に属し，人並み以上の教育を受けていた。そして二人ともおとなしく優しそうに見えたが，心も性格も並み外れて強かった。その二人のうちで年上のエミリー・デイヴィスは当時の女性の改革者たちと同じように牧師の娘で，広範囲な機会を持つことが出来た兄弟たちを通じて間接的に大学に接触することも出来た。そして1858年に彼女は兄と一緒にアルジェリアに行ったが，そこで彼女はアルジェリアに住む医師と結婚したマダム・ボディションと出会い，親しくなった。エリザベス・ギャレットは学校に行かされたが，そこで友達になった人たちを通じてエミリー・デイヴィスと知り合いになり，彼女たちはすぐに意気投合し，二人の間の友情は彼女たち両方の人生に永続的な影響を与えた。彼女とエミリーが初めてランガム・プレースに連絡を取った時，二人は目の前に開けたフェミニストたちの理想に魅了された。この二人にエリザベスの妹のミリセント・ギャレット・フォーセット（ヘンリー・フォーセット夫人）（1847—1929）が加わり，その三人がイギリスの女性運動に巨大な影響を与えることになった。そのことに関して非常に面白いエピソードが残っている。エミリーがギャレット家に泊まりに行き，その夜，エリザベスの寝室の暖炉のそばでエミリーとエリザベスが一緒に座って話をしていた。その時，まだほんの小さい女の子であったミリセント・ギャレットは椅子に座ってその近くで話を聞いていたが，何も

言わなかった。その二人の友人同士が女性運動に自分たちの生涯を捧げようと熱く話をしていた時に，エミリーがその問題を総括して，「そう，エリザベス，何をしなければならないかはまったく明らかだわ。私は高等教育に，あなたは女性に医学の門戸を開くこと，そして，ミリィ，あなたは私たちよりも若いのだから，女性が投票権を獲得するようにしなければならないのよ。」と言ったと伝えられている。このエミリーの言葉通り，エミリー・デイヴィスは女子の大学教育開拓者になり，エリザベス・ギャレットは最初のイギリス女性医師に，そしてミリセント・ギャレット・フォーセットは女性参政権運動の指導者となって，全国女性参政権協会（NUWSS）の会長になったのである。

5.　女性参政権運動

教育改革や雇用の機会拡大など諸々の領域でのフェミニスト運動が進展するにつれて，それら諸要求の実現の手がかりとして婦人参政権がフェミニストの至上の目標とみなされるようになった。男性労働者のための第二次選挙法改正運動が高まっていた時，女性の選挙権への要望も高揚していた。ジョン・スチュアート・ミルは女性参政権の問題を取り上げるという条件で選挙に出ることを承知した。様々な革新派やフェミニストのグループがミルを支援し，ランガム・プレースのグループも応援し，マダム・ボディションやエミリー・デイヴィスが選挙運動をして，1865年に彼は国会議員に選出された。ミルが下院に当選するとマダム・ボディション，エミリー・デイヴィス，そしてエリザベス・ギャレットたちは彼に女性参政権問題を議会に提出するように要請した。彼から同意を得ると彼女たちは積極的に署名集めをした。このときにマダム・ボディションとエミリー・デイヴィスはエリザベス・ギャレットたちに援助を求め，初の女性参政権委員会を設立し，著名人の署名を集めたが，その中にはフローレンス・ナイティンゲール，ハリエット・マーティノーらがいた。そして選挙法改正法案が審議される五月までには3,000人以上の署名を添えた請願書が提出された。マダム・ボディションの女性参政権の講演を聞いたリディア・ベッカー（1827—1890）はこの話によって運動に目覚め，後に参政権運動の中心的人物になっていった。

1867年，第二次選挙法改正の討議がされたときに婦人参政権の修正案を提出した。ミルの議会での女性参政権についての演説は真摯で，深い思索に支えられたが，それは否決されて，賛同者はわずか80人だった。当時，政治の舞台に女性が出ることは女性の美徳である優しさ，穏やかさが失われ，家庭が崩壊することにつながらないかと危惧する考えが一般的だったからである。しかし，これによって女性参政権運動の第一歩が踏み出され，これが政治問題の一覧表に加えられた。

1870年に再び，女性参政権法案を議会に提出し，第二読会まで通過したが，結局，委員会でグラッドストン氏（1809—1898）は断固と反対意見を述べ，法案は通らなかった。

女性参政権法案は議会を通過しなかったが，その後1880年，女性参政権についての講演会がリディア・ベッカーなどによって，企画され，多くの町で催されると，一般の人々の支持は熱狂的になっていった。演説する身分の高い婦人たちと同様に，女子の労働者たちも押しかけ，彼女たちも選挙権を欲しがっていることを示した。そして自由党が準備している第三次選挙改正法案を戦いの目標として定めることにした。また，リディア・ベッカーは『女性参政権ジャーナル』（*The Women's Suffrage Journal*）を創刊し，終生これを編集した。さらにちょうどその時期に既婚女性財産法改正の問題が起こり，1881年に完全な法案がスコットランドで通過し，1882年にイギリス，アイルランド，ウェールズへと広がった。

別の方向から，女性が突如として，選挙に役立つ存在になってきたことで，それが女性運動の進展に重大な影響を与えることになった。1883年の腐敗選挙防止法によって，これまで男性だけが選挙の補助的な仕事をして賃金を支払われていたが，選挙にお金を使ってはいけないことになり，比較的暇なボランティアの女性が選挙員として採用され，選挙運動に協力することになった。そのため，女性を常設的に確保しておいた方が良いということになり，保守党支持の女性は「プリムローズ・リーグ・女性評議会」，自由党支持の女性は「女性自由連盟」の組織の中で，それぞれのために活動した。このことは多くの女性の投票勧誘員を政治に目覚めさせ，女性参政権を支持する考えにさせたし，宣伝活動の中心にもなった。特にフェミニストたちは自由党の勝利に貢献した。

1880年の総選挙は女性参政権に好意的な多数の議員の復帰をもたらし，自由党の集会で女性参政権が決議された。しかし，1884年に第三次選挙改正法案が提出されたが，その法案には女性についてはまったく言及していなかった。その時，党首のグラッドストンは女性参政権を持つことには反対した。彼はその理由をはっきり示さなかったが，おそらく，女性参政権が保守党に有利に作用すると考えたからであると思われた。そのために採決になった時，女性参政権支持者であると約束した自由党員の104人が女性参政権修正案に反対の票を投じた。また，保守党の指導者のディズレリなどは女性参政権に賛成したが，一般議員たちは逆に，女性が政治に参加するという考え方そのものに反対した。いまや農業労働者を含めることによって，男性は完全に公民権を与えられたので，これ以上民主主義を推し進める起動力は無く，女性参政権法案を持ち出そうとするならば，男女不平等という観念のみで独力で立ち上げなければならない。男子は欲しいものすべてを手に入れてしまったのである。彼女たちの多くが議会推進派への信頼を失ってしまった。

しかし，さらに，国会議員よりも手ごわい反対派が現れた。1889年に女性参政権に対する抗議文が大勢の著名な夫人たちの署名入りで雑誌に出された。彼女たちの多くは女性教育運動の支持者で，慈善運動や社会活動もしていた。このことが一層女性参政権運動に水をさすことになり，運動そのものが停滞する。

国会議員において女性参政権に対する関心が盛り上がった第二の時期は1890年代末から始まった。ニュージーランド（1893）やオーストラリア（1894）における女性参政権の付与，また，女性参政権に好意的な独立労働党の創設（1892）によって，運動に大きな刺激が与えられた。1897年に女性参政権法案が第二読会を通過したのを契機として，それまで各地に分裂していた選挙権協会が再び統合され，「女性参政権協会全国連合」（National Union of Women's Suffrage Societies，略して，NUWSS）が結成され，エリザベス・ギャレットの妹のミリセント・フォーセット夫人が会長に就任した。これがロンドンを中心とする組織だとすると，マンチェスターを中心とする北部工業都市では独立労働党の人々の熱心な支持で特に綿工業女性労働者の中に広がった組織が生まれた。前者の人々をサフラディスト（女性参政権論者）と呼び，後者はラディカル・サフラディストと呼ばれた。さらに1903年には有名なパンクハースト夫人

（エメリン・パンクハースト）（1858—1928）が，マンチェスターの工場労働者を中心に「女性社会政治連合」（Women's Social & Political Union，略してWSPU）を結成し，後にサフラジェットと呼ばれるようになった。労働党の誕生（1906）で労働党は女子選挙権よりは普通選挙権を求めたので，パンクハースト夫人は自分たちの要求が受け入れられず，離党する。彼女は自由党にも労働党にも信頼を失い，協会の穏健なやり方にも満足できず，マンチェスターで活動していた人びとと結成した。当初ラディカル・サフラジストとサフラジェットは相携えて活動するが，後者の戦闘性が激しくなるとたもとを分かった。サフラジェットはパンクハースト夫人とその娘のクリスタベル・パンクハースト（1880—1958）を中心として「女性に投票権を」の旗を押し立てて，放火闘争にまで至る実力闘争を展開し，世間から注目された。彼女たちに対する政府の弾圧は厳しく，逮捕や投獄が相次いだが，彼女たちは獄中でハンストなどによって抵抗した。ラディカル・サフラディストはむしろ穏健で，冷静，組織的で民主的な活動をしていたフォーセット夫人のグループと共同行動を取るようになった。運動の進め方の異なる穏健派と放火や投石など戦闘的な手段を取るサフラジェットとの対立，また，労働界での「制限資格を排除し，すべての男女に対する選挙権を要求する成人選挙権論者（普選派）」と「男性と同じ資格を有する女性に選挙権を与えようとする制限付女性選挙権論者（婦選派）」の対立が複雑に絡み合い，女性選挙権は結局，1918年に至るまで得られなかった。

女性参政権運動の簡単な系図を示すと次のようになる。

① サフラディスト（suffragist）（女性参政権協会全国連合）（NUWSS）（女性参政権論者）（1897）（ミリセント・フォーセット夫人）ロンドンを中心とする。ミドル・クラスの女性の運動。穏健派。

② ラディカル・サフラディスト（急進派サフラディスト）マンチェスターを中心とする北部工業都市で綿工業女性労働者の組織で労働党と関係する。

③　サフラジェット(suffragette)（女性社会政治連合）（WSPU）（パンクハースト母娘）（1903）ミドル・クラスの女性の運動。戦闘派。

1907年にはフォーセット夫人の率いるサフラディストは最初の公でのデモ行進を行ない，ハイドパークからエクセターホールまで約3000人の女性が行進した。1912年の労働党大会は「女性を含まないいかなる選挙権法案をも認めない」という決議を採択したために再び婦選派の統一が成立した。サフラジェットの戦闘派の過激さが増してくると，自由党は多くの迷惑と侮辱を与えられた戦闘派の運動に憤慨し，国民の感情に目を向けようとしなかった。彼らは戦闘派に対する厳しさと民衆の運動への無関心さがすべて運動を終息させると考えているように見え，その問題を避けようとした。

1914年に第一次世界大戦が勃発すると他の政治闘争と同様に女性参政権運動も姿を消した。女性参政権運動の団体は政治活動を中止し，政府は収監されていたサフラジェットたちすべてに恩赦を与えた。戦闘的活動は立ち消えになり，サフラジェットは話題にのぼらなくなった。しかし，根強い組織を持つNUWSSは生き残った。NUWSSのメンバーは男性たちが戦勝で戦っているために自分たち女性が何か役に立ちたいと思った。また産業界も女性たちを戦争に行っている男性たちに代わって使おうとし，女性たちも新しい技術を習得していった。これに対して，残っていた男性労働者たちは女性に自分たちの領域が犯されることに不安を感じ始めたのだった。

戦争が終われば国会の力は回復されなければならないと人々は認識し，民主政治を存続させるには選挙の実施が不可欠だった。そしてその選挙には兵士や海軍軍人が投票すべきだったが，参政権に基準を変更しないでそのような選挙を実施することは不可能だった。というのは人口が変化し，従来の選挙人名簿が信憑性の無いものになったのである。1915年に名簿の作成が強く求められるようになり，NUWSS派は自分たちの意見を主張する必要を感じ，女性も戦争に大きく貢献した旨の親書をアスキス首相（1852—1928）に送った。長年の敵対者のアスキスも女性も戦争に貢献したので，その親書の正当性を認め，産業の復興の段階で彼女たちの主張を聞き入れるべきではないかと意見を述べた。そして，1918年には30才以上の女性に参政権を認める内容の法案が議会を通過

した。ここにおいて女子は30才以上で地方自治体の有権者であるか，または有権者の妻である者に初めて，選挙権が与えられた。最終的には1928年に男女平等の普通選挙が実現した。

イギリスの女性参政権獲得までの道のりは次の通りである。

1832年	第一次選挙法改正（中産階級の男性に選挙権与えられる）
1838～1848年	チャーティスト運動
1867年	第二次選挙法改正（都市の労働者に選挙権与えられる）
1884年	第三次選挙法改正（小作農民層に選挙権が与えられる）
1918年	第四次選挙法改正（成年男子と一部の婦人の普通選挙権獲得：女子は30才以上で地方自治体の有権者であるか，または有権者の妻である者に初めて，選挙権が与えられ，女性に参政権が認められた。人民代表法成立）
1928年	すべての21才以上の男女に選挙権が与えられる（平等選挙権法）

6．女子の雇用問題

女性運動の最初の動きは個々の女性たちが自分たちの無力さに目覚めたところから始まった。慈善的，人道的運動が進むにつれてこの動きは表面化していき，19世紀の中ごろまでには女性の置かれた地位は何か間違っているという考え方にも違和感を持たない人の数が著しく増えた。結婚に対するゆがんだ理想像は間違った考えが蔓延していた結果である。いったんこれに疑問が投げかけられるとこれに反発する男女の数が急速に増えていっても当然である。因習を

強く押し付けた結果は若者たちの反発をあおり，キリスト教社会主義運動というものに参加していった。18世紀に始まった産業革命も19世紀に入り，その進展につれて，女性の社会的位置も変化してきた。夫の仕事のパートナーとしての位置から夫に扶養されるものへと女性の立場は変化し，社会の隅々まで影響を及ぼした。下層階級の女性は過酷な肉体労働を余儀なくされ，健康を損ねてしまったが，裕福な家の女性は，家で無為に時間を過ごし，そのような大半の女性たちは軽薄で虚栄心の強い女性になっていった。このようにして女子における階級の二極分化が進んだのである。

リンカン法学院の牧師，フレデリック・デニソン・モーリス（1805—1872）や牧師で作家のチャールズ・キングズリー（1819—1875）の周りに集まった人びとはフェミニズムを唱えたわけではなかったが，結果的にその影響がフェミニズムの方向へ働くことになった。彼らは女性が彼らの活動に参加するのは当然だと考えており，女性が自由に話し合いに参加することも認めた。モーリスやキングズリーたちが攻撃したのは社会における階級の問題であり，階級による富の分配の問題だった。彼らの実験的な試みの対象は本質的には男性でも女性でも良かった。キリスト教社会主義のリーダーだったモーリスは1830年代，40年代においては女性の社会的存在を本当に信じていた数少ない男性の一人であった。

キリスト教社会主義者たちが最初に目を向けたのは婦人服の縫い子と紳士服仕立て職人の労働条件であった。男女の仕立人職人の抱える問題はほぼ同じであることに気づき，女性労働者の実態を調査した結果，女性労働者の境遇の方が男性労働者よりかなりひどいことがわかった。年間約四ヶ月にわたる華やかな社交シーズンの期間中，最も就業規制の整った洋裁店でも通常の労働時間は15時間であった。しかも，過酷な労働にもかかわらず，賃金は安く，季節労働だったので，社交シーズンが終わると何ヶ月も仕事がなかった。また，特に女子労働者の数が非常に多かったが，それに対して女子には他の就職口があまりに少なかったのである。女性たちの選択肢は縫い子になるか，売春婦になるか，さもなければ，貧民収容所行きになるかであった。

女性労働者の悲惨な状況は19世紀になって，初めて世間に注目されるようになった。人道的運動の先頭に立った福音主義の政治家のシャフツベリ卿（1801

—1885）は数々の調査委員会を設置し，実態を明らかにした。工場労働の実態が明らかになるにつれて，工場労働者の間で，労働時間の上限を設けようとする動きが起こった。雇用者側の強い反対と当時の経済理論の前には男性労働者の労働時間の短縮を要求するのは無理なことのように思われた。そこで回り道が取られて，女性と子どもの労働時間の短縮を要求することにした。これによって工場の機械停止は避けられず，その結果，男性労働者の労働時間も短縮できるはずだった。「女性のペチコートの陰に隠れて」という有名な文句はこの時の女性を利用した男性たちの行動から使われようになった。そしてこの男性たちの企てはある程度成功し，1847年に10時間労働法が成立して，女性と若年労働者の労働時間が制限された。その際，男性の労働時間は法制化されなかったが，事実上，女子と同じ時間に短縮された。

この法案を通すために長年，闘争が続いたが，その間に女性就労者の数が多いことに対して男性労働者が不安を感じ始めたのである。女性労働者の賃金が低いことと長時間労働も女性は素直に受け入れ，それに耐えられるという理由で男女の労働者の数において，差が大きくなったことがその理由である。1841年にはすべての女性労働者を工場労働者から徐々に排除するという提案が労働時間短縮委員会でなされた。こうして，綿および毛織物業界を除いて女性労働者数を制限することが通例になっていった。

また，炭鉱で働く女性労働者の悲惨な状況が報告され，その結果，すべての女性と10才以下の子どもに地下構内での労働を禁じる法が立法化された。しかし，この女性を保護するための法律は逆に彼女たちを同じく悲惨な状況に追いやった。炭鉱の仕事が奪われる結果になり，彼女たちを飢えさせることになったからである。いずれにしても労働条件の改善が図られても，女性の賃金が低いことは変わらず，女性は産業界では負け犬のように最も低い地位にあるということは世の中の法則になってしまった。女性労働者の問題に対する政治家の関心は長く続かなかった。というのは女性には男性に安らぎを与える役割があり，そこに妻の存在価値があることは慣習，法律，キリスト教会などではっきり宣言されていたからである。女性は当然，夫に支えられ，保護されているので，何も妻が働かなくてよいという考えに落ち着いてしまった。結局，工場労働や肉体労働に従事する労働者階級の女性たちの苦労は女性運動に直接の影響

を与えることはなかったのである。

しかし，働く女性たちが苦労と重労働にあえいでいた間も，男性に尽くし，彼らに安らぎを与え，子どもを生むという女性の社会的役割のために，女性の地位が改善されないと感じていた人たちは女子労働の問題に取り組んでいた一方で，別の運動も推し進めていった。キリスト教社会主義者たちが女子洋裁職人の境遇の改善に成功できなかったので，次に目を向けたのはガヴァネスの問題だった。ガヴァネスの数が過剰で，平均年俸が5ポンドという安い給料で「レディーのような」服装を整えたり，家族を養うことなどは難しかった。ガヴァネスは中流階級のきちんとした家庭に生まれても，父や夫が亡くなったり，婚期を逃したりしたために生活苦に陥った女性たちに開かれた唯一の職業であり，生活手段であった。彼女たちは一般に教職のための訓練どころか，良い教育さえも受けていないものがほとんどだった。彼女たちが労働市場に持ち込めるものは「品の良さ」と必要に迫られているということだけだった。そのような事情から1841年にガヴァネス協会が設立された。この協会の目的は「一時的に困窮状態にある女性たちに年金を支給し，個別のきめ細かい援助をすること」であった。1830年代の銀行の倒産で何千人もの女性が同じ状況に投げ出されていたのだった。この協会が設立されるとそこに何百件もの気の毒なケースが殺到した。キリスト教社会主義者たちはこの悲惨な中産階級の女性たちへの唯一の効果的な援助は彼女たちの職業水準を上げることだという結論に達した。つまり，もし，ガヴァネスの教え方が向上すれば，より高い給料を取ることが出来るようになるので，これが唯一の改善方法だと考えたのだった。

7. 女子教育

ガヴァネスの教育を充実させるという目的で，ロンドン大学キングス・コレッジの教授陣によって，ガヴァネスに教職免許状を与えるための委員会が構成された。そしてチャールズ・キングズリーの精力的な支援のもとで「女性のための講座」が1847年に始まった。これと同じ頃，ヴィクトリア女王の侍女の一人であったミス・マリーが女子教育の向上のための募金活動を独自に行なっていて，この講座の話と重なったため，この二つの計画がガヴァネス互助協会の

もとに統合されることになり，講座の開講が決定されたのだった。

キングス・コレッジのこの講座は大成功で，これは常設の教育施設へとほとんど即座に格上げされ，クィーンズ・コレッジが1848年に創設された。このコレッジは大学の外部に位置づいていたので，高等教育という男性の領分を脅かすものではなかった。最初の年に入学した200人の学生はかなりの数の講義の中から選択できたが，このカレッジでは初等科目の基礎を教えることになった。というのも入学してきた女性たちはみな文法や算数の基礎も知らないということがわかったからである。しかし，まもなく教師たちは基礎科目が主要部分を占めるカリキュラムを作成し，英文学，社会学，哲学を含む上級講座も用意された。科学の講座は女性の聴衆が多く，女性の数が多いので本当の聴衆が締め出されないように女性をまったく入れない講座もあった。このような女性を締め出すような措置に抗議し，辞職したロンドン大学の教授もいた。講演を聴き，知識を得ようと多くの女性たちが押し寄せたというのがこの時期に現れた現象だった。そこで，女性からの要望が多かったので，クィンーズ・コレッジの開校後一年で，第二の女子大学の開校に向けて，計画が進められ，1849年にベッドフォード・コレッジが開校した。

クィンーズ・コレッジとベッドフォード・コレッジの教育方法は同じ内容だったが，二つの大学には大きな違いがあった。クィンーズ・コレッジは規約上，まったく男性主導の大学で，女性の参加が認められたのは，唯一，婦人視学監，つまり，学生の付き添い役としての仕事だけだった。一方，ベッドフォード・コレッジは富裕なユニテリアンであるエリザベス・リード夫人によって創設され，男女からなる経営陣を配するという進歩的な方式を取り入れた。1878年にロンドン大学の学位が女性に対して男性と対等な条件で授与されることになってからは，大学の事業に組み込まれることになった。もっともベッドフォード・コレッジは大学の地位を得たが，クィンーズ・コレッジは得られなかった。

これらの二つの大学には，後に組織化された女性運動において重要な役割を果たした多くの女性たちが入学してくることになった。彼女たちの中にはバーバラ・リー・スミス，住宅改革者のオクタヴィア・ヒル（1838—1912），女性医学教育のパイオニアであるソフィア・ジェクス＝ブレイク（1840—1912），女子教育に貢献したフランシス・メアリー・バス（1827—1894）とドロシア・

ビール（1831—1906）などがいた。これらの大学が女性たちの密かに抱いていた夢の実現に希望を与え，また，モーリス，キングズリーとその仲間たちはこれらの若い女性たちを認め，そして励ますことで，女性運動に多大な貢献を果たした。しかし，この時はまだ，女性が男性と対等な条件で大学に入学する権利はなかったのだった。

女子の大学教育への進出の最初の試みは1867年に中産階級の女性たちによる様々な団体がケンブリッジ大学のジェイムズ・スチュアートという教師を招いて，リヴァプール，マンチェスター，シェフィールド，リーズの都市で講義を開催したことである。彼は天文学の歴史について，講義したが，これを実現させたのは主に，北部イングランド女性高等教育推進協議会の努力による。この試みは大学の構外にあるセンターで行われ，成人が学習することを目的としたパートタイムの高等教育と言える。

しかし，エミリー・デイヴィスなどの女性教育改革運動の主導者たちは女性に対してフルタイムの大学教育を与えたいと思っていたので，大学がパートタイムで提供するクラスがその代替物になってしまわないかと懸念した。デイヴィスは大学生活において一つの構成部分となる女子のコレッジを設立し，男子学生と同じ科目を学習させることを考えていた。彼女の考えは中産階級に支配的な考え，つまり女性は男性に服従し，妻，母として家庭を守るべきであるという家庭重視の考えと真っ向から対立するものであった。女性たちが男性と同一の科目を学び，有給の専門的職業につくのが理想であるとエミリー・デイヴィスなどフルタイムの女性高等教育のパイオニアたちは考えた。しかし，女性が男性と同じ課程を履修すべきか，それとも，別個の課程を履修すべきか，そして，また，女性が男性と同じ試験を受けるべきか，それとまた別の試験を受けるかなどの問題が出た。これらの問題はケンブリッジやオックスフォードの大学においての女子教育の問題として女子教育の主導者たちによって議論された。

1867年にエミリー・デイヴィスは女子大学設立の計画をマダム・ボディションに相談した。そして総合委員会がつくられ，募金作戦を開始した。彼女はケンブリッジ大学から将来，学位を受けることを考え，ロンドンとケンブリッジの中間にあるヒッチンに女子のためのコレッジを1869年に開校した。その目的

は女子学生をケンブリッジ大学の試験に向けて勉学させることだった。21人が応募してきて，16人が合格し，収容限度の６人が入学した。講師陣はケンブリッジから汽車で通ってきた。やがて学生数も増えてくるとヒッチン・コレッジは1872年にケンブリッジに近いガートンに新校舎を立てて移った。ガートン・コレッジはケンブリッジ大学の一構成部分というよりもむしろその外部にあり，創立の原理は男性と同一の教育を提供することでエミリーは男女同一の高等教育に固執した。

エミリー・デイヴィスの計画と同時期に北イングランドでジェマイマ・クラフ（1820―1892）が女子の高等教育推進運動をしていた。彼女はマクミラン誌に論文を掲載し，その中で，男性の大学教授でおもに構成される，女子教育を指導監督するための特別委員会の設立と，とりわけ，若い女性および高年齢の女性のための大学教授による講義を各地で開講する提案をした。この提案は，もちろん，ジェイムズ・スチュアートが一年ほど後に男性労働者に関して持ち出したものと同じで，最終的に大学公開講座運動で具体化されることになった。さらに彼女は男女が同一の試験を受けるのは望ましくないと考え，ケンブリッジ大学に対し，18才以上の女子を対象とした試験を求める請願書を出したが，これが認められ，1869年に36人の志願者が受験した。クラフは女性を男性と分離して異なる教育を与える主義だった。1870年にケンブリッジ大学の教師であるヘンリ・シジウィック（1838―1900）の援助によって，女性の試験に合格することを目的として，女性対象の特別講義が創設された。遠方から来る学生のための宿舎の確保は難しかったので，結局1871年，彼が資金を出して小さな家をリージェント通りに買い，クラフに管理を頼んだ。そして1874年にニューナムに新しい建物が建てられ，そこに移ってニューナム・コレッジが始められた。このように，ガートンとニューナムのコレッジはそもそもの始まりから異なる志向をもっており，ガートンは男性と同一の知的活動が出来るようにしようとしたのに対して，ニューナムは女性を男性と分離して異なる教育を与えることを基本原理とした。

この後，女性が男性と同一の条件で学位試験の受験資格を獲得し，学位を取得出来るまでには長く，苦難に満ちた道のりを歩まなければならなかった。その闘いの道程は遅々としたものであり，1881年にケンブリッジ大学は女子の学

位試験を許可したが，女子が学位を取得するのは認めなかった。ケンブリッジ大学では1921年まで女子には学士号は与えられず，最終的に譲歩して，女性に男性と同じ条件で学位を取得することを認めたのはやっと1947年になってからであった。それはオックスフォード大学の承認から28年後のことだった。

＊本稿は2003年２月８日，城西大学女子短期大学部主催の女性学講座「イギリスの女性運動」を基にしたものである。

＜参考文献＞

Ray Strachey, *The Cause,* rpt. of 1928 (London: Virago, 1978)

今井けい『イギリス女性運動史――フェミニズムと女性労働運動の結合――』(日本経済評論社，1992)

ジューン・パーヴィス　『ヴィクトリア時代の女性と教育――社会階級とジェンダー――』香川せつ子訳（ミネルヴァ書房，1999)